

鹿児島県鹿児島市方言



鹿児島県南九州方言区画図

【鹿児島県の方言区画】鹿児島県ではトカラ列島と奄美大島の間を境に、日本語と（北）琉球語が分かれる。以前は本土方言（あるいは南九州方言）と奄美方言のようにどちらも日本語の方言とみなされることが多かったが、現在では言語的な差異の大きさやユネスコによる危機言語の認定など社会的な状況も加味し、奄美以南のことばを別の言語（（北）琉球語）と認めるのが主流である。いずれにせよ、県内ではここに大きなことばの境界線があることになる。南九州方言は薩摩半島・大隅半島を合わせた薩隅方言、甌島・屋久島・種子島・トカラ列島などの離島方言に二分され、後者はそれぞれ独自の方言を有しているという特徴がある（木部 1997）。

【鹿児島市方言について】本稿で記述する鹿児島市方言は薩隅方言に属し、二型アクセントや、後述するように促音で終わる音節があるなど、音韻・音声

面に独自の特徴がみられる。しかしながら急速な共通語化により、アクセント以外の伝統方言の特徴は失われつつあり、特に若年層では共通語化志向も強く、方言の記述が大変行にくい状況にある（後述する話者も高齢ではあるが方言がなかなか出てこない話者である）。このような状況のなか、鹿児島県は2017年8月、毎年11月第3週を「方言週間」に制定すると発表した。研究者としては、消滅の前に行える限り記述・記録に取り組む必要がある。

特に後掲する「多段型動詞の基幹音便形」に関する音韻規則として、/ai/は[e]、/ii/は[i]、/ui/は[i]、/ei/は[e]、/oi/は[e]、/au/は[o]、/uu/は[u]、/ou/は[o]、となることがある。本稿の記述が煩雑にならないよう、ここで記しておく。また、動詞の/ru/は基本的には促音化するが（kir-u > kiQ, mi-ru > miQ など）、鼻音で始まる形式に続くと[n]になることがある。

【調査概要】本稿の記述は、1940年生まれの女性（調査時77歳）への面接調査に基づいている。22歳から約10年間の屋久島での居住を除き、鹿児島市外での外住歴はない。調査に同席した配偶者（1935年鹿児島市生まれ、26歳から約15年間の屋久島での外住歴あり）の意見も参考にしたところがあるが、ほぼ女性の回答をデータとしている。一部の用例は、後藤（1994）にあるものを参考にしながら話者に問うた。

鹿児島県鹿児島市方言の活用表

《動詞》

		多段型 書く	二段型 受ける	一段型 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去	カッ	ウクッ	ミッ	クッ	スッ
	断定過去	ケタ カイタ	ウケタ	ミタ ミッタ	キタ	シタ
	命令	カケ カカンカ	ウクレ ウケンカ	ミレ ミランカ	ケ コンカ	セ センカ
	禁止	カッナ	ウクンナ	ミンナ	クンナ	スンナ
	意志	カコ (一)	ウク (一)	ミロ (一)	ク (一)	ス (一)
	推量	カコ (一) カッドー カッジャロ (一)	ウク (一) ウクッドー ウクッジャロ (一)	ミロ (一) ミッドー ミッジャロ (一)	ク (一) クッドー クッジャロ (一)	ス (一) スッドー スッジャロ (一)
	否定意志	カツメ	ウクンメ	ミーメ	クイメ	スイメ
接 続 類	連体非過去	カッ	ウクッ	ミッ	クッ	スッ
	連体過去	ケタ カイタ	ウケタ	ミッタ ミタ	キタ	シタ
	中止	ケッセー ケッ	ウケッセー ウケッ	ミッセー ミッ	キッセー キッ	シッセー シッ
	否定中止	カカンジ カカジ	ウケンジ ウケジ	ミランジ ミラジ	コンジ コジ	センジ セジ
	仮定	ケタラ カイタラ カケバ	ウケタラ ウクレバ	ミタラ ミッタラ ミレバ	キタラ クレバ	シタラ スレバ
派 生 類	否定	カカン	ウケン	ミラン	コン	セン
	丁寧	カッモス カンモス	ウケモス	ミモス	キモス	シモス
	使役	カカスッ	ウケサスッ	ミスッ	キサスッ キラスッ	サスッ
	受身	カカルッ	ウケラルッ	ミラルッ	コラルッ キラルッ	サルッ
	可能	カッガナッ カカルッ	ウケガナッ ウケラルッ	ミガナッ ミラルッ	キガナッ コラルッ	シガナッ サルッ
	尊敬	カッキヤッ	ウケヤッ	ミヤッ	キヤッ	シヤッ
	継続	カキオッ ケチョッ カッカタジャッ カキゴッ	ウケオッ ウケチョッ ウッカタジャッ ウケゴッ	ミオッ ミチョッ ミカタジャッ ミゴッ	キオッ キチョッ キカタジャッ キゴッ	シオッ シチョッ シカタジャッ シゴッ
	希望	カコゴチャッ	ウクゴチャッ	ミロゴチャッ	クゴチャッ	スゴチャッ
	のだ	カットジャッ	ウクットジャッ	ミットジャッ	クットジャッ	スットジャッ

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak-u > kaQ	カイ-タ、ケ-タ	kをiにする(音韻規則適用の場合もあり)。
g	脱ぐ nug-u > nuQ	ヌイ-ダ、ニ-ダ	gをiにする(音韻規則適用の場合もあり)。 -タが-ダになる。
s	出す das-u	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac-u > taQ	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
b	飛ぶ tob-u > toQ/toN	トン-ダ	bをN(撥音)にする。 -タが-ダになる。
m	飲む nom-u > noN	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。 -タが-ダになる。
r	切る kir-u > kiQ	キッ-タ	rをQ(促音)にする。
w/ø	歌う uto(w)·u > uto	ウト-タ	wをuにする(wの前の母音はu, oのみ。音韻規則適用)。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い		静か(だ)	学生(だ)	
		カ語尾型	イ語尾型			
終 止 類	断定非過去	アカカ	アケ	シズカジャッ	ガクセージャッ	
	断定過去	アカカッタ	アケカッタ	シズカジャッタ	ガクセージャッタ	
	推量	アカカロ(一) アカカジャロ(一)	アケカロ(一) アケジャロ(一)	シズカジャロ(一)	ガクセージャロ(一)	
接 続 類	連体非過去	アカカ	アケ	シズカナ	《ガクセーノ》	
	連体過去	アカカッタ	アケカッタ	シズカジャッタ	ガクセージャッタ	
	中止	アカカッセー アコシッ アコシテ	アケカッセー アケッセー アケシッ アケシテ	シズカデ	ガクセーデ	
		仮定	アカカッタラ アカカレバ	アケカッタラ アケカレバ	シズカジャッタラ シズカジャレバ シズカナラ	ガクセージャッタラ ガクセージャレバ ガクセーナラ
派 生 類	否定	アコナカ アコネ	アケナカ アケネ	シズカジャナカ シズカジャネ	ガクセージャナカ ガクセージャネ	
		なる	アコナッ	アケナッ	シズカイナッ	ガクセーニナッ
	丁寧	アカカイモス	アケカイモス	シズカジャイモス シズカゴアス シズカガス	ガクセージャイモス ガクセーゴアス ガクセーガス	
		尊敬	アカカイヤッ	アケカイヤッ	シズカジャイヤッ	ガクセージャイヤッ
		のだ	アカカトジャッ	アケトジャッ	(該当形 欠)	(該当形 欠)

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」と基幹二段型(以下「二段型」)があり、所属語彙は少ないが基幹一段型(以下「一段型」)もある。多段型にはa類動詞(「書く」「居る」「死ぬ」など)が所属する。一段型にはb類のうち「見る」「着る」「起

きる」などおおよそ古典語の上二・二段動詞が、二段型にはb類のうち「受ける」「上げる」などおおよそ古典語の下二段動詞が所属する。

多段型の基幹にはア・イ・ウ・エ・オの5つ、および音便形がある。「カッ」(書く)の場合、カカン(kak-a-N)、カキ-オツ(kak-i-oQ)、カケ-バ(kak-e-ba)、カコ(kak-o)、カッ(kak-Q < kak-u)、ケ-タ・カイタ

(ke-ta, kai-ta) などとなる。基幹ウ段形は、語幹末 s の動詞でのみダス (das・u ; 出す) などと現れるが他の語幹末子音の動詞では促音または撥音化する。語幹末子音ごとの具体的な形は表「多段型動詞の語幹音便形」に示す。また、語幹末子音には、k、g、s、t、b、m、r、w がある。語例は表「多段型動詞の語幹音便形」のとおりである。この方言では「死ぬ」にあたる動詞が、断定非過去形ケシン (kesiN < kesim-u)、否定形ケシマン (kesim-a-N) のように m 語幹動詞となり、n 語幹動詞が存在しない。また、かつては他の九州方言同様、b、m 語幹動詞はトダ (飛んだ)、ノダ (飲んだ) のように音便が存在していたようである (現在では聞かれない)。

二段型の基幹にはウ・エ段の 2 形がある。「ウクッ」(受ける) の場合、ウク-ツ (uk-u-Q)、ウク (uk-u) などウ段、ウケ-タ (uk-e-ta)、ウケ-ン (uk-e-N) などはエ段となる。

一段型の基幹にはイ段がある。この方言では一段型動詞の r 語幹動詞化が進んでおり、「ミッ」(見る) の場合、命令形ミレ mi-re (r 語幹とみなせば mir-e ; 以下同様)、意志・推量形ミロ mi-ro (mir-o)、否定形および否定中止形でミラン mi-raN (mir-a-N)、ミラジ mi-razi (mir-a-zi) などとなる。過去形はミ-タ (mi-ta) となるが、r 語幹化したミッ-タ (mir-ta > miQtā) もある。

不規則な活用をする動詞に「クッ」(来る) と「スッ」(する) がある。ともに一段型に近い活用をするが、「クッ」は基幹がキ、ク、コの 3 段になり、キ-タ (k-i-ta)、クッ (k-u-Q)、コ-ン (k-o-N) などとなる。命令形の「ケ」は k-o-i の/oi/が[e]で実現したものであり、ここでは基幹の一つとは考えない。「スッ」は基幹がサ、シ、ス、セの 4 段になり、サ-ルッ (s-a-ruQ)、シ-タ (s-i-ta)、ス-ツ (s-u-Q)、セ-ン (s-e-N) などとなる。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

共通語同様、断定非過去形と連体非過去形の区別はなく、「カッ」「ウクッ」「ミッ」「クッ」「スッ」などとなる。多段型動詞の場合は前掲の表「多段型動詞の基幹音便形」の語例を参照されたい。その他の動詞は、基幹に促音が続く形になる。二段型動詞・「来

る」・「する」はウ段形に、一段型動詞は基幹 (= 語幹。全てイ段形) に、促音が続く。「受ける」のような二段型動詞は、ここではウ段形をとる。

・コレカラ オハンゲー クッデナー。(これからあなたの家に行くからね。)

〈断定過去形〉

非過去形同様、やはり断定過去形と連体過去形の区別はない。多段型は前掲の表「多段型動詞の基幹音便形」を参照されたい。二段型は「ウクタ」などエ段をとる。一段型は「ミタ/ミッタ」など基幹または「基幹+促音」に、「来る」「する」はそれぞれ「キタ」「シタ」とイ段形に、それぞれ「タ」を付す。前述のとおり、一段型動詞の「ミタ」は本来の形、「ミッタ」は r 語幹化したものである。これは同一の話者でもゆれがみられる。

・ケサ テレビオ {ミタ/ミッタ} ドー。(今朝テレビを見たよ。)

〈命令形〉

「カケ」「ウクレ」「ミレ」「ケ」「セ」のようになる。多段型・「する」はエ段をとる。二段型はウ段形に、一段型は基幹に、それぞれレを付した形となる。一段型動詞は r 語幹化した形と言える。「来る」は前述したとおり、「コイ」(k-o-i) が音韻規則により「ケ」になったものとする。また、「カカンカ」「ウケンカ」「ミランカ」「コンカ」「センカ」のように、九州方言に広くみられる否定形にカのついた形も命令として機能する。

・テレビガ ヨカトガ アッデ {ミレ/ミラ
ンカ}。(テレビがいいのがあるから見る。)

〈禁止形〉

「カッナ」「ウクンナ」「ミンナ」「クンナ」「スンナ」のようになる。多段型の場合は断定非過去形と同形のものにナがついた形をとる。二段型・一段型・「来る」・「する」は基幹にンが続き、さらにナが付く形となる。

・ショチュオ ノンダデ キョワ ウンテンナ
スンナ。(焼酎を飲んだから今日は運転はするな。)

〈意志形〉

「カコ」「ウク」「ミロ」「ク」「ス」のようになる。多段型はオ段(長音)形、二段型および「来る」「する」はウ段形をとる、言い換えれば、多段型動詞は

oo、二段型動詞および「来る」「する」はuを接辞として用いる。ここでは/VV/は[V]で実現することもあり、[V:]となることもあり、これは自由変異のようである。一段型動詞は「ミロ」となることから、r語幹化しオ段（長音）形をとることがわかる。

・テレビョ ミロー。(テレビを見よう。)

〈推量形〉

意志形としても用いられる「カコ」「ウク」「ミロ」「ク」「ス」などとなるが、どちらかという断定非過去形に「ドー」または「ジャロ（ヤロ）」という接語を用いることのほうが多いようである。

・アン ヒタ サンジー {クッドー／クッジヤロー}。(あの人は3時に来るだろう。)

〈否定意志形〉

「カツメ」「ウクンメ」「ミーメ」「クイメ」「スイメ」などとなる。多段型の場合は断定非過去形と同形のものにメがついた形をとる。二段型はウ段形にンが続きさらにメがつく形、一段型動詞は基幹の長音形にメがつく形、「来る」「する」はウ段形にイが続きさらにメがつく形となる。多段型以外の場合も、断定非過去形を作る接辞がこのメがつく環境でンやイに実現すると考えられそうにも思うが、二段型と一段型・「来る」「する」に共通する断定非過去の接辞が想定しにくい。ここでは表層の形を示すにとどめる。

・モー コトシャ ネンガジョーワ カツメ。
(もう今年は何賀状は書かないでおこう。)

〈連体非過去形〉

上述のとおり断定非過去形と同形である。

・サンジー クツ ニモツガ モー キタドー。
(3時に来る荷物がもう来たよ)

〈連体過去形〉

上述のとおり断定過去形と同形である。

・ケサ {ミタ／ミッタ} ニュースワ オモシテカッタ。(今朝見たニュースはおもしろかった。)

〈中止形〉

「ケッセー」「ウケッセー」「ミッセー」「キッセー」「シッセー」のように、「ッセー」という接辞を使用する。多段型は過去形を作るときと同じ基幹音便形をとる。二段型はエ段、「来る」「する」はイ段をとる。

・ベンキョー シッセー ネットー。(勉強して寝るよ。)

また、「ケツ」「ウケツ」「ミツ」「キツ」「シツ」のような形も中止形として機能する。上記の「ッセー」同様、多段型は過去形を作るときと同じ基幹音便形をとる。二段型はエ段、「来る」「する」はイ段をとり、促音を足して用いる。

・テレビョ ミツ ネット。(テレビを見て寝た。)

〈否定中止形〉

「～(ン)ジ」を使用し、「カカ(ン)ジ」「ウケ(ン)ジ」「ミラ(ン)ジ」「コ(ン)ジ」「セ(ン)ジ」などとなる。多段型はア段、二段型はエ段、「来る」はオ段、「する」はエ段をとる。一段型はr語幹化している。それぞれにジまたはンジを付す。ンが入るのは否定の意味を分析的に表そうとする変化であると考えられる（鹿児島県内では他地域でもみられる）。

・サンジー {コンジ／コジ} ヨジー キタ。
(3時に来ないで4時に来た。)

〈仮定形〉

「～タラ」「～バ」が使用される。共通語同様、「～タラ」は断定過去形の作り方に準ずる。「～バ」はエ段をとる。

・ハガキョ ケタラ ネットー。(はがきを書いたら寝るよ。)

・ベンキョー スレバ ビンタガ ヨーナットー。(勉強すれば頭がよくなるよ。)

また、「ナラ」や「トキヤー」も認識的条件文を作る形式として使用される（「トキヤー」は「時は」に由来すると思われる）。いずれもテンスの対立があるため、断定非過去形または断定過去形に接続する。

・テレビョ ミンナラ デンキョ ツケヤイ。
(テレビを見るなら電気をつけなさい。)

・イエー キタトキヤー デンワオ クイヤイ。
(家に来たら電話をください。)

〈否定形〉

「カカン」「ウケン」「ミラン」「コン」「セン」などとなる。多段型はア段、二段型動詞はエ段をとる。一段型動詞はr語幹化した形をとり、多段型に準ずる。「来る」はオ段、「する」はエ段をとる。

・モー ニドト イカンドー。(もう二度と行かないよ。)

なお、ンは「～ンジャッタ(ヤッタ)」のように過去形を作る。中年層では「～ンカッタ」になることもある。

〈丁寧形〉

「～モス」を用いた「カッモス(カンモス)」「ウケモス」「ミモス」「キモス」「シモス」などとなる。多段型はイ段をとるが、s語幹動詞とw語幹動詞以外の場合は母音が脱落し、促音または撥音になる。二段型動詞はエ段をとる。「来る」と「する」はイ段をとる。

- ・アタイガ カンモノカイ? (私が書きましょ
うか?)

なお、モスは否定で「モハン(＜モサン)」、過去で「モシタ」、仮定で「モセバ」、命令で「モセ」、意志・推量で「モン」などと活用する。

〈使役形〉

「～(サ)スッ」を用いた「カカスッ」「ウケサスッ」「ミスッ」「キサスッ/キラスッ」「サスッ」などとなる。多段型・二段型は否定形の作り方に準じ、それぞれ「～スッ」、「～サスッ」を付す。一段型は「～スッ」を付す。「キラスッ」はr語幹化し「～スッ」をとっているが、「キサスッ」は「来る」がイ段を、「サスッ」はア段をとり、それぞれ「～サスッ」、「～スッ」を付す。「～(サ)スッ」自体は二段型に準じた活用をする。

- ・コドンニ カンジョ ドッサイ カカセタ。
(子どもに漢字をたくさん書かせた。)

〈受身形〉

「～(ラ)ルッ」を用いた「カカルッ」「ウケラルッ」「ミラルッ」「コラルッ」「サルッ」などとなる。多段型・二段型は否定形の作り方に準じ、それぞれ「～ルッ」、「～ラルッ」を付す。一段型は「～ルッ」を付す。「来る」は「コラルッ」のほかに「キラルッ」もある。使役形の作り方に準ずる。「～ルッ」自体は二段型に準じた活用をする。

- ・トモダンニ ワレコチョ サレタ。(友だちに
悪いことをされた。)

〈可能形〉

「～ガナッ」を用いた「カッガナッ」「ウケガナッ」「ミガナッ」「キガナッ」「シガナッ」、「～(ラ)ルッ」を用いた「カカルッ」「ウケラルッ」「ミラルッ」「コラルッ」「サルッ」などとなる。「～ガナッ」は

助詞ガに動詞「なる」がついたものである(助詞はワやモなどにも代わりうる)。よってガの前につく形は名詞ということになる。多段型はイ段、二段型はエ段、一段型はイ段、「来る」・「する」はイ段をとる。「～(ラ)ルッ」は受身形と同様の形をとる。なお、現在では能力可能と状況可能を特に区別しないが、若年層の一部では能力可能に「～キル」の使用がみられる。

- ・アタイガ ナンデン シガナッ。(私は何でも
できるよ。)

〈尊敬形〉

「～ヤッ」を用いた「カッキヤッ」「ウケヤッ」「ミヤッ」「キヤッ」「シヤッ」などとなる。丁寧形に準じた形をとるが、k、g、s、t、b、m語幹動詞の場合、基幹母音イはそれぞれk、g、s、t、b、mに変化し(b語幹動詞の場合はbbがmbとなることもある)、「カッキヤッ」(書)、「カッギヤッ」(嗅)、「ダッシヤッ」(出)、「タッチャッ」(立)、「トッピヤッ」「トンピヤッ」(飛)、「ノンミヤッ」(飲)などとなる。r、w語幹動詞はイ段形に「ヤッ」が付き、「キリヤッ」(切)、「ウトイヤッ」(歌)などとなる。

- ・センセーガ サンジニ キヤッデ。(先生が3
時にいらっしゃるから。)

〈継続形〉

多くの西日本方言同様、ヨル/トルの対立を持ち、前者は「カキオッ」「ウケオッ」「ミオッ」「キオッ」「シオッ」などとなり進行を、後者は「カイチョッ/ケチョッ」「ウケチョッ」「ミチョッ」「キチョッ」「シチョッ」などとなり結果を表す。ただし、現在では「～チョッ」は進行を表すようになっている。丁寧形に準じた形をとるが、多段型が「～チョッ」をとる場合は音便形になる。

- ・アタイガ イゼンカラ カキオッド一。(私が
さっきから書いているよ。)

- ・イツ ソージョ スト一? チレチョッド一。
(いつ掃除をするの? 散らかっているよ。)

このほか、この話者は使用しないが、進行を表す「～カタ」と「～ゴッ」も存在する。「カッカタ」「ウケカタ」「ミカタ」「キカタ」「シカタ」、「カキゴッ」「ウケゴッ」「ミゴッ」「キゴッ」「シゴッ」などとなる。どちらも丁寧形の作り方に準じた基幹をとる。なお、「～カタ」は名詞的であり、「カッカタジャッ」

などとコンピュータを続けて用いる。本稿の記述ではコンピュータを「ジャツ」を代表させているが、同一話者でも「ジャツ」と「ヤツ」でゆれがみられる（以下同様）。

- ・クルマガ キカタヤツド。(車が来ているよ。)
- ・アメガ フイゴツ。(雨が降っている。)

〈希望形〉

意志・推量形に「ゴチャツ (<ゴト アツ)」がついた「カコゴチャツ」「ウクゴチャツ」「ミロゴチャツ」「クゴチャツ」「スゴチャツ」などようになる。

- ・モット ミゴツ カコゴチャツ。(もっときれいに書きたい。)

〈のだ形〉

準体助詞トを用いた「カットジャツ」「ウクットジャツ」「ミットジャツ」「クットジャツ」「スットジャツ」などとなる。

- ・コトシャ ネンガジョー カット? (今年は年賀状を書くの?)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

鹿児島県内、特に薩摩半島でよくみられるように、伝統的にカ語尾とイ語尾が共存している。語彙的にカ語尾をとりやすかったりイ語尾をとりやすかったりといった傾向がみられるものの、詳しいことはまだわかっていない(筆者の調査による)。本稿ではカ語尾もイ語尾もとりうる「赤い」を例に、カ語尾型とイ語尾型の両方を記述していく。ただし、厳密に言うところの方法には問題がある。断定非過去形の「アカカ」はカ語尾型、「アケ」はイ語尾型と考えることができる。しかしながらその他の活用形については、たとえば断定過去の「アカカッタ」をカ語尾型、「アケカッタ」をイ語尾型と考えるのは正確ではない。正確には、前者は語幹に接辞がつく活用型、後者は断定非過去形に接語がつく無活用型とでも呼ぶべきであろう。つまり、「アカカッタ」はカ語尾型ともイ語尾型とも区別がつかない(つけられない)ということである。そのため前述の表は体系的な記述にはなっていないが、便宜的に前者をカ語尾型、後者をイ語尾型としてまとめたものである。

カ語尾型の活用形は、共通語のいわゆるカリ活用の形よりも充実しており、中止形「〜カッセー」、丁

寧形「〜カイモス」、尊敬形「〜カイヤツ」でも多段型r語幹動詞に準じた形をとる。

なお、中止形・否定形・なる形では、語幹末母音がaの場合のみ交替語幹を用いた形がある(語幹末母音がeの話は存在しない)。下表はカ語尾型(活用型)の否定形の一例を示している。

語幹末母音	交替後	例
a	o	アカカ アコナカ
i	i	ウレシカ ウレシナカ
u	u	ウスカ ウスナカ
o	o	シロカ シロナカ

〈断定非過去形〉

カ語尾であれば「アカカ」、イ語尾であれば/ai/が[e]で実現し「アケ」となる。他の語幹末母音の場合は、/ii/は[i]で実現し「ウレシ(うれしい)」、/ui/は[u]で実現し「ウシ(うすい)」、/oi/は[e]で実現し「シレ(白い)」などとなる。前述の動詞の場合同様、断定と連体の形態上の違いはない。

- ・ポストワ {アカカ/アケ}ド。(ポストは赤いよ。)

〈断定過去形〉

「アカカッタ」と「アケカッタ」があるが、後者は前述の断定非過去形「アケ」に「カッタ」をつけるいわゆる無活用化(大西 2016 など)が起こっている。そのため、前者をカ語尾、後者をイ語尾のパラダイムに組み込んで考えるのが適切であろう。以下に示す諸活用形においても、同様の無活用化は一貫してみられる。

- ・ショツオ ノンセー ツラガ {アカカッタ/アケカッタ}。(焼酎を飲んで顔が赤かった。)

〈推量形〉

「アカカロ」「アケカロ」など、語幹(イ語尾の無活用化した場合も含む)に「カロ」を付した形、「アカカジャロ」「アケジャロ」など、断定非過去形に「ジャロ/ヤロ」を付した形がある。

- ・シンゴワ ドコデン {アカカロ/アカカジャロ/アケジャロ}。(信号はどこでも赤いだろう。)

〈連体非過去形〉

上述のとおり断定非過去形と同形である。

- ・{アカカ/アケ} ボーシオ カブッチョッタ。
(赤い帽子をかぶっていた。)

〈連体過去形〉

上述のとおり断定過去形と同形である(事態としては過去でも、連体過去形が必須になる例文が得られなかったため例文は省略する)。

〈中止形〉

動詞と同様、「～ッセー」を用いた「アカカッセー」や「アケカッセー」がある。後者は「アケッセー」となることもある。

- ・コン リンゴワ {アカカッセー/アケカッセー/アケッセー} ンーメドー。(このリンゴは赤くておいしいよ。)

また、交替語幹の「アコ」や「アケ」などに、動詞「する」に由来する「シテ」がついた「アコシテ」や「アケシテ」もある。「シテ」は「シッ」となることも多い。

- ・コン リンゴワ アコシテ ンーメドー。(このリンゴは赤くておいしいよ。)

〈仮定形〉

動詞同様「～タラ」「～バ」を用い、「アカカッタラ」「アケカッタラ」、「アカカレバ」「アケカレバ」などとなる。「レバ」は「リャ」となることもある。

- ・リンゴガ {アカカリャ/アケカリャ} ンーメドー。(リンゴが赤ければおいしいよ。)

また、「ナラ」もテンスの対立を持つ形式として使用され、「アカカナラ」「アケナラ」などとなる。

〈否定形〉

交替語幹に「ナカ/ネ」のついた「アコナカ/アコネ」や「アケナカ/アケネ」などとなる。

- ・アンマイ {アコナカ/アコネ/アケナカ/アケネ} ドー。(あんまり赤くないよ。)

〈なる形〉

否定形と同じく交替語幹を用い、「アコナッ」や「アケナッ」などとなる。

- ・イッキ ヒヤケシテ アコナッ。(すぐに日焼けして赤くなる。)

〈丁寧形〉

動詞と同様「～モス」を使い、「アカカイモス」「アケカイモス」となる。

- ・ハシッタラ ハヤカイモス。(走ったら早いで

す。)

〈尊敬形〉

一部の形容詞にのみ尊敬形が存在し、動詞と同様に「～ヤッ」を用いた「アカカイヤッ」「アケカイヤッ」などとなる。

- ・センセーワ セガ タケカイヤイナー。(先生は背がお高いなあ。)

〈のだ形〉

動詞と同様、準体助詞トを用いた「アカカトジャッ」「アケトジャッ」などとなる。

- ・ツラガ {アカカ/アケ} トー？(顔が赤いの？)

【形容名詞述語】

九州方言によくみられるように、形容名詞が形容詞的な活用をとることは多い。このとき、「ミゴッカ/ミゴテ(見事だ)」、「テソカ/テセ(たいそうだ)」のように、カ語尾をとることもイ語尾をとることもある。このように形容詞的な活用をするものは「赤い」のような形容詞の活用に準ずるものとし、ここでは名詞的な活用をするものを記述する。コンピュータは後述する名詞述語でも「ジャッ/ヤッ」が用いられるが、多段型動詞に準じた活用形を、共通語の「だ」よりも充実させている。Nを名詞とすると、基幹がア段であればNジャラセン(否定疑問のみで用いる)、イ段であればNジャイモス(丁寧形)、ウ段であればNジャッ(断定・連体非過去形)、オ段であればNジャロ(推量形)となる。一部の形容名詞にはシズカジャレのように命令形も存在し、エ段もそろえていることになる。

なお、福岡市若年層方言(平塚2014)などと違い、鹿児島市方言では形容名詞の「のだ形」は存在しない(後述する名詞述語も同様)。

〈断定非過去形〉

「シズカジャッ/シズカヤッ」などとなる。

- ・ココワ ワッゼ シズカジャッ。(ここはとても静かだ。)

〈断定過去形〉

「シズカジャッタ/シズカヤッタ」などとなる。連体形との形態上の違いはない。

- ・トショカンワ ダイモ オランジ シズカジャッタ。(図書館は誰もいなくて静かだった。)

〈推量形〉

動詞、形容詞同様「ジャロ／ヤロ」を用いた「シズカジャロ／シズカヤロ」などとなる。

- ・ヤスミジャッデ シズカジャロ。(休みだから静かだろう。)

〈連体非過去形〉

共通語同様「シズカナ」などとなる。

- ・コゲン シズカナ ヘヤニ トマトワ コエド。(こんな静かな部屋に泊まるのは怖いよ。)

〈連体過去形〉

上述のとおり、断定過去形と同形である。

〈中止形〉

共通語同様「シズカデ」などとなる。

- ・イタラ シズカデ ヨカッタ。(行ったら静かでよかった。)

〈仮定形〉

動詞、形容詞同様「～タラ」「～バ」「ナラ」を用いた「シズカジャッタラ／シズカヤッタラ」、「シズカジャレバ／シズカヤレバ」、「シズカナラ」などとなる。

- ・モチット シズカジャレバ ヨカッタトニナ一。(もうちょっと静かだったらよかったのになあ。)

〈否定形〉

「ジャナカ／ジャネ」を用いた「シズカジャナカ／シズカジャネ」などとなる。

- ・コドンノシガ オッデ シズカジャナカ。(子どもたちがいるから静かじゃない。)

〈なる形〉

「シズカイナッ」などとなる。調査がおよんでいないためはっきりとしたことは言えないが、助詞は(形容)名詞が長音、撥音、促音で終わっていればニ、それ以外の場合はイで現れるものと思われる。

- ・オコット イッキ シズカイナッ。(怒るとすぐに静かになる。)

〈丁寧形〉

動詞、形容詞同様「～モス」を用いた「シズカジャイモス／シズカヤイモス」などとなる。

- ・ヤマンナカワ シズカジャイモス。(山の中は静かです。)

また、「ゴアス」を用いた「シズカゴアス」なども

ある。

- ・ヤマンナカワ シズカゴアス。(山の中は静かです。)

〈尊敬形〉

動詞、形容詞同様「～ヤッ」を用いた「シズカジャイヤッ／シズカヤイヤッ」などとなる。

- ・センセーワ カネテ シズカジャイヤッ。(先生はいつもお静かだ。)

【名詞述語】

前述のとおり、名詞述語にも「のだ形」は存在しない。

〈断定非過去形〉

形容名詞同様、コピュラは「ジャッ」と「ヤッ」でゆれ、「ガクセージャッ／ガクセーヤッ」などとなる。

- ・アン ヒタ {センセージャッ／センセーヤッ}ド。(あの人は先生だよ。)

〈断定過去形〉

形容名詞同様、「ガクセージャッタ／ガクセーヤッタ」などとなる。連体形との形態上の違いはない。

- ・アタヤ ムカシャ {センセージャッタ／センセーヤッタ}。(私は昔は先生だった。)

〈推量形〉

動詞、形容詞、形容名詞同様、「ジャロ／ヤロ」を用いた「ガクセージャロ／ガクセーヤロ」などとなる。

- ・アカチャンワ タブン オナゴシコジャロナ。(赤ちゃんはたぶん女の子だろうなあ。)

〈連体非過去形〉

共通語同様「ガクセーノ」などとなる。

- ・コヤ センセーノ カバンジャッドー。(これは先生のかばんだよ。)

〈連体過去形〉

上述のとおり、断定過去形と同形である。

- ・ガクセージャッタコイガ ナツカシカナ一。(学生だった頃が懐かしいなあ。)

〈中止形〉

共通語同様「ガクセーデ」などとなる。

- ・コッチガ タローデ コッチガ ジロージャッドー。(こっちが太郎でこっちが次郎だよ。)

〈仮定形〉

動詞、形容詞、形容名詞同様「～バ」を用いた「ガクセージャレバ／ガクセーヤレバ」などとなる。

- ・チョーナンジャレバ イエオ ツガントイカン。(長男だったら家を継がないといけない。)

〈否定形〉

形容名詞同様「ガクセージャナカ／ガクセージャネ」などとなる。

- ・{タロージャナカ／タロージャネ} ドー。(太郎じゃないよ。)

〈なる形〉

形容名詞同様「ガクセーニナツ」などとなる。

- ・タローワ イシャドシニ ナツドー。(太郎はお医者さんになるよ。)

〈丁寧形〉

形容名詞同様「～モス」を用いた「ガクセージャイモス／ガクセーヤイモス」、「ゴアス」を用いた「ガクセーゴアス」などとなる。

- ・アン ヒトガ {シャチョージャイモス／シャチョーヤイモス／シャチョーゴアス}。(あの人が社長です。)

〈尊敬形〉

動詞、形容詞、形容名詞同様「～ヤツ」を用いた「ガクセージャイヤツ／ガクセーヤイヤツ」などとなる。

- ・ココシ ヒトジャイヤツ。(この人でいらっしやる。)

参考文献

- 大西拓一郎(2016)『ことばの地理学—方言はなぜそこにあるのか』大修館書店
- 木部暢子(1997)「総論」平山輝男編『日本のことばシリーズ46 鹿児島県のことば』明治書院
- 後藤和彦(1994)『鹿児島方言の語法研究』私家版
- 平塚雄亮(2014)「福岡県福岡市方言」方言文法研究会(編)『全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』科研費報告書

(平塚雄亮)